
魔法少女リリカルなのは ～大空と大地～

紅の牙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 　　く大空と大地く

【Nコード】

N0993Z

【作者名】

紅の牙

【あらすじ】

神様に間違っで殺された少年はREBORNの力をもらってリリカルなのはの世界に転生した。さあ、原作ブレイク、って住んでる所ミッド！？ブレイクできないじゃん！？主人公は準チートです。それでもよろしければ見てください

プロローグ

「……………」

俺は真っ白な空間に立っていた

「……此处、どこ？」

俺は訳が分からなかった

「確か俺は、REBORNを読んでいたんだよな。つで、急に目眩がして……さっぱり解らん」

「あの〜」

「うん？」

俺が記憶を思い出していると、後ろから声を掛けられた。振り向くと、そこには聖闘士セイヤに出てくるサーシャさんそっくりな人がいた

「どちら様ですか？」

「あ、すみません。私はアテナと言います」

「マジですか!?(何でこんなにそっくりなの!?)」

「それで、・・・すいませんでした!!」

アテナ様が俺に頭を下げた

「謝れる理由が解らないんですが」

「実はですね、貴方は死んでしまったんです」

「な、何だと・・・」

「私の部下が、間違って貴方の書類にハンコを押してしまっ
て・・・」

「それで、死んじゃったと」

「・・・はい」

「・・・それで、俺はこのまま天国にGOなんですか？」

「・・・怒らないんですか？」

「貴方に怒った所で俺が生き返るわけじゃないですからね」

「そうですか。それで、先程の答えですが。貴方には他の世界で
新たな命で生きてもらいます」

「ほうほう」

「行先は『リリカルなのは』の世界です」

「ちょっと待て！！リリカルなのはってアニメですよね！？」

俺はアテナ様の言葉に待ったをかけた

「貴方は平行世界って知ってますか？」

「ええ、知ってますけど。それが・・・・・・・・ああ、成程」

俺は理解し手を叩いた

「つまり、俺の世界ではアニメでも平行世界では現実としてある。そう言うことですね」

「はい、その通りです。それで、お詫びとして、4つまで貴方に力を与えます。何がいいですか？」

「ふ〜〜む」

俺は考え始めた

「じゃあ、REBORNの『大空』、『大地』の炎。ツナの『超直感』。ナッツ、正し、ボックス兵器じゃなくて、キャロのフリード見たいな感じ。後はデバイスかな」

「・・・・・・・・」

「どうしたんですか、ハトが豆鉄砲を喰らったような顔をして？」

「い、いえ。他のひとは仮面ライダーの変身ツールだとか、王の

財宝などを頼んでいたものですから」

「あく成程。俺は努力して力を得るタイプなんで。まあ、超直感
はチートだけど」

「解りました。デバイスと使役獣にかんしては後でお送りします」

「はい、ありがとうございます」

「では、貴方の歩む道に幸のあらんことを」

アテナ様がそう言うと、俺の意識が再び途切れた。そして

「おぎゃああああ（・・・解ってはいたけど。まさか、また赤ん
坊からとはな）」

こうして、俺の新たな人生が始まった

第1話

仁 side

どうも、火群仁です。なのはの世界に転生してから、早10年、早いもんだね。まあ、俺のいる所が海鳴市でなく、ミッドだったのは驚いたが、更に驚いたのが、父さんと母さんの容姿がREBO RNのツナと京子で、しかも名前まで同じきたからさあ大変

「ガオ！」

「おっと、サンキューナッツ。お蔭で、ぶつからずに済んだ」

「ガウ♪」

俺は肩に乗っている、相棒のナッツに礼を言った。ナッツと会ったのは6年前、家の庭の隅で丸まって寝ているのを見つけ、そのまま飼うことになった

「そう言えば、父さんが今日渡したいものがあるって言ってたけど、何だろうな」

「ガウ？」

「ナッツに聞いても解らねえか。まあ、楽しみにしてようぜ」

「ガウ♪」

そして、その夜

「仁、こっちに来てくれないか？」

「うん」

俺は父さんに呼ばれ、リビングに降りてきた

「あれ、母さんは？」

「お風呂だ」

「あ、成程」

「仁、今朝言ったこと覚えてるか？ 渡したいものがあるって」

「うん」

「これを、お前に渡す」

父さんは俺に小さな箱をくれた

「……これは？」

「開ければわかるよ」

そう言われ、俺は箱を開けた。開けるとそこにはリングが入っていた

「父さん、これって・・・」

「うん、仁のデバイスだよ。仁は魔法と格闘の基礎が出来てきたからね、そろそろ渡してもいいと思ってね」

「俺の・・・デバイス」

「起動させてご覧」

「う、うん」

俺は箱からリングを取りだし、指にはめた。そして、魔法陣を展開した

「マスター認証、火群仁。術式は近代ベルカ。正式名称『レグルス』」

『認証確認、よろしく頼むぜ旦那』

「だ、旦那!？」

俺はレグルスの発言に驚いた

「レグルス、これから仁の事をよろしく頼む」

『まかせて下せえ、親方』

その後、俺は父さんにレグルの性能を聞き、明日稽古をつけてくれると約束したので、興奮しながらベッドに向かった

第2話

仁 side

レグルスを貰った次の日、俺は父さんと、家の地下にある練習場にきていた

「さて、準備はいいかい、仁？」

「勿論」

「じゃあ、始めよう。レオーネ、セットアップ！」

『Setup』

父さんはグローブを装着しバリアジャケットを身に纏った（ボングレ？世そのまんま）

「俺達も行くぞ、レグルス」

『あいよ、旦那』

「セットアップ！！」

『装着』

俺は籠手型のアームドデバイスを装備し、バリアジャケットを身

に纏った

「あれ？右手の甲と左手の甲のマークが違うな」

俺が不思議に思っていると

『旦那、左手の甲のマークが違うのは、こっちの方にあるものが装備されているからだぜ』

「あるもの？」

『おうよ、左手の籠手は旦那のレアスキルの一つ、『重力』を操作できるようになってるのさ』

「へえ」

「仁、そろそろいいかい？」

「あ、うん」

父さんに言われ、俺は返事をした

「仁は魔法と格闘の基礎はもうできてるからね。足りないのは戦闘経験。だから、これから軽い模擬戦をやるよ。ルールは簡単、俺に一発でも当てることが出来れば仁の勝ち。そして、15分間攻撃に当たらなければ俺の勝ち。いいかい？」

「はい」

「じゃあ、始めよう」

そう言うと、父さんの雰囲気が変わった

仁 side end

3人称 side

「……………」

仁は綱吉から放たれるオーラに冷や汗を流した。そして、

『Sonic move』

綱吉の姿が消えた

「っ!!」

仁は反射的にしゃがむと、橙色の魔力を纏った手刀が空を切った。そして、仁は直ぐにその場から離れた

「いい反応だね」

綱吉は笑顔で言った

「……父さん、今のアレを喰らったら、絶対に首がおれたと思うんだけど」

「大丈夫、ちゃんと加減はしているから」

「（……あれで、加減してるって、本当かよ？）レグルス！
」

『S o n i c m o v e』

仁は綱吉から最初に習った高速移動で綱吉の左脇に移動した

「はあっ！！」

そして、魔力の纏った右拳を叩き込んだ

「……」

綱吉はそれを、木の葉が落ちるような動きでかわし、掌底を仁に打ち込んだ

「があっ！！」

仁は吹き飛んだが、直ぐに受け身を取り、衝撃をいなすと、再び綱吉に突っ込んだ

「はあああああっ！！」

「がむしやらに突っ込んでも意味は無いよ」

そして、綱吉は回し蹴りを仁に繰り出したが

『S o n i c m o v e』

当たる直前に高速移動を使い、後ろに回り込んだ

「はあああああっ!!！」

「甘い!!！」

綱吉は振り向きながら裏拳を仁に繰り出した。だが、

『S o n i c m o v e』

仁は再び高速移動を使い、綱吉の後ろに回り込んだ

「貰ったー!!！」

そして、炎を纏った拳を打ち込んだ。当たった瞬間、纏っていた炎が爆発し、黒煙が舞った。煙が晴れると、そこには仁の拳を止めている綱吉がいた

「うそー!?!」

仁はショックを受けた。完璧に防御できない体勢に打ち込んだのだから、ショックも大きい。仁は直ぐに綱吉との距離を取った。しかし、綱吉は構えを解き、笑顔だった

「・・・父さん?」

「この勝負、仁の勝ちだよ。ほら」

綱吉はマントの一部を仁に見せた、よく見ると、焼かれた跡があった

「一撃を与えたら勝ちって言ったけど、誰も体には言っていないからね」

「や、や、やったー」

仁はジャンプをしながらガッツポーズをした

「それにしても、最後の動きは良かったよ。当たる直前に高速移動で後ろに回り込み、追撃がきた瞬間、また後ろに移動し、防御できない体制の相手に攻撃する。どんなに強い魔道士や騎士でもまず反応できないね」

「でも、父さんは反応出来たよね？」

「うん。仁も知ってると思うけど、俺もレアスキル『超直感』があるからね。ギリギリで反応が出来たんだよ。仁も俺の攻撃を超直感で感じ取ったんだろう？」

「う、うん」

「でも、例え来るって解っても、体が着いて行けなきゃどうしようもないけどね。さあ、上に上がって、朝ご飯を食べよう、京子が待ってるはずだからね」

「はい」

そして、その日の夜、家のチャイムが鳴った

「あれ、誰だろう？」

「母さん、俺が出てくるよ」

そう言い、仁は玄関に向かった

「どちら様ですか？」

「仁君？クイントだけど」

「クイントさん？今開けますね」

仁が開けると、隣の家に住んでいる、ゲンヤさんとクイントさん、そして見慣れない二人の女の子がいた

「え〜と（誰だ、この二人？）」

「仁？誰がきたのって、クイントさんにゲンヤさん。こんばんは」

仁が戻ってこないの、綱吉と京子が玄関にやってきた

「こんばんは京子ちゃん、綱吉君。今日は火群家に私達の娘を紹介しに来たの。GINGA、スバル挨拶しなさい」

「は、初めまして、GINGA・ナカジマです。よろしくお願いします」

「えっと、・スバル・ナカジマです。よ、よろしくお願いします」

「（ギンガとスバルだとー！？もうそんな時期なのかよ！？）」

仁は驚いていた

「初めまして、火群京子です。よろしくね、ギンガちゃん、スバルちゃん」

「俺は火群綱吉だよ。よろしくね、ギンガちゃん、スバルちゃん」

綱吉と京子が二人に挨拶をした

「ほら、仁も」

「あ、うん。火群仁だ。よろしくな二人とも。っで、俺の肩に乗ってるのが相棒のナッツだ」

「ガオ」

「「よ、よろしくお願いします」」

「ギンガ、スバル、仁君は二人より年上だから、好きに呼んでいいのよ」

「えっと、じゃあ、仁兄さんって呼んでもいいですか？」

「え？か、構わないけど」

「じゃあ、私は・・・仁兄って呼んでもいい？」

「あ、ああ」

仁が照れていると

「なんだ、仁。照れてるのか？」

「て、照れてなんかいいよ。ただ、兄さんって呼ばれるのが、なんか嬉しくて」

「仁君は一人っ子だもんね」

クイントが笑顔でそう言った。こうして、仁の慌ただしくも充実した一日が終わった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0993z/>

魔法少女リリカルなのは ～大空と大地～

2011年12月3日21時52分発行